



星と☆形【5】

星と☆形— The Symbol of Stars —第5章

西村昌能（京都府立洛東高等学校） & TENKYO-ML ☆形チーム

第5章 天の川の文化史

5.1 はじめに

いよいよ、星と☆形の最終章になりました。この連載の起こりは2001年8月に天文教育普及研究会のメイリングリストへの投稿からはじまったのです [1] が、このMLの話題の中に中国での天の川の話がありました。☆形とは直接関係はないのですが、一章をあげてお話を進めて行くことにします。ということで、今回は天の川のお話です。

5.2 天の川

☆形から天の川の話へと広がったのは、大島修さん（岡山県立鴨方高校）から次のようなメールが来たからです。

「星の『ほ』はホタルの『ほ』に同じというこのMLでの議論を読んでいて、この夏に出会った天の川にまつわる話題をつい書きたくなっていました。（話題が拡散しなければいいのですが）」

昨年の12月に森本雅樹さんから、天の川と「漢」（国の名）の起源が同じなんだという話を聞かされました（モリモトオジサンも飲んでいてもまじめな話をすることもあるのです）。漢水と呼ばれる川が揚子江の支流にあること、それは、源を同じくして、地上の川が『漢水』で、天を流れる川が『天漢』（天の川）なのだそうです。話の出所はどうやら白川静さんあたりのようでした。帰って調べると『字統』にも載っていました。その時、私も酔った勢いで、きっと川の流れの方向が同じであるために、天の川が川に映って、天と地に同時に見える光景から来ているのではな

いですかと、いて座の天の川あたりをイメージしながら、当てずっぽうを言ってしまいました。それは面白い、大島説として売り出せと言われ、『ははは』と笑い合って終わりました。

その後、文化人類学の大林太良さんが亡くなったという新聞記事を読んでいて、著書に『銀河の道 虹の架け橋』[1]という、天の川と虹の起源にまつわる世界の民族に伝わる話をまとめた大著があることを知り、さっそく入手しました。私の小遣いではちょっと高価ではありましたが、中国の天の川に関しては、森本さんからうかがった域を越えたことは書いてありませんでした。（それより、北尾浩一さんのように、自分の足で世界の民族から採集した話を元に本を書かれたのだろうという私の思い込みは見事に打ち砕かれ、主に西洋の学者の書いた文献を調査してまとめたもので、ちょっとがっかりでした。それでもきつと偉い仕事なのでしょうが）

で、この夏、京都でJAHOU集会がある機会に、美星天文台の綾仁さんと川端さんと一緒に、小暮智一先生宅を訪ねたところ、書架に『銀河の道 虹の架け橋』があるのを見つけ、以上のような話をしたところ、こんな本もあるよ、と紹介されたのが、魚住孝義著『万葉集 天の川伝説』[2]でした。

その扉の絵を見たときに、あっと言われました。輝く星ぼしをちりばめながら細くなって地平線に沈む天の川、そして地平線を対称軸として、とうとうと流れる川に映った天の川が描かれていました。そこには、まさに地平から起源を同じくして天と地の川が二つに分かれて流れてくる光景があったのです。これが、中国の天の川の起源の謂れなん

だと納得しました。早速、その本をお借りして読んでみると、実に面白い話がたくさん書かれてありました。敗戦を目前にした6月下旬に、中国河北省老河口という街を占拠した日本軍が川を望む高台で警備していると夜中に火の玉が現れるという警備日誌の記述があり、しかも毎日少しずつ現れる時刻が遅れるようで、これを目にした下士官が、不審に思い確かめに行く。北東から流れてくる川（これが漢水）の左岸に立つと、午後10時20分過ぎに、天の川が漢水の川面にさしかかり、先に述べたこの本の扉の絵のような情景が現れたのだそうです。いて座の天の川ではなくて、北東の空にペルセウスからぎょしゃ座にかけて地平線から現れる天の川だったので、扉の絵にもぎょしゃ座の五角形らしき輝星が描かれています。

そして、著者の魚住さんが現地の作家湯礼春さんから得た、その地に伝わる七夕伝説をまとめたもの（天の羽衣にも関係しています）も載っています。万葉集の中で七夕を題材とする歌のうち、天の川を歌った歌が47首あり、その33首が『天漢』と書いて『あまのかわ』あるいは『あまのがわ』と読ませているそうです。この本を読んで、まさに七夕の頃に、漢水に天の川が映るすばらしい光景から、天の羽衣伝説、七夕伝説、漢（漢水、天漢、漢という国名）の起源が統一的に解き明かされたようで、感動しました。絶版になる前に自分でも持っておきたいと思い、さっそく amazon.co.jp で発注しました。』

と、大島さんは長文のメールを投稿されたのでした。ここから、第5章の天の川の調査が始まったのです。（図5-1、図5-2）

5.3 天の漢水

大島さんのメールに早速、多くの方が返答されはじめました。

服部完治さん（名古屋市科学館）は、「なぜ



図5-1
魚住孝義著
「万葉集 天の川伝説」
の表紙

『天の漢水』なのかについて、以前、京都大学人文科学研究所の小南一郎先生（中国文学）に伺ったところ、これにはいろいろな説があって、代表的なのは以下の2つだそうです。

- (1) 中国の川はみんな東西に流れているけれど、漢水だけは南北に流れているから。（天の川と流れる方向が同じ）
- (2) 天の川に関する伝説の発達したのが漢水の流域であり、自分たちのところで一番大きな川だから。

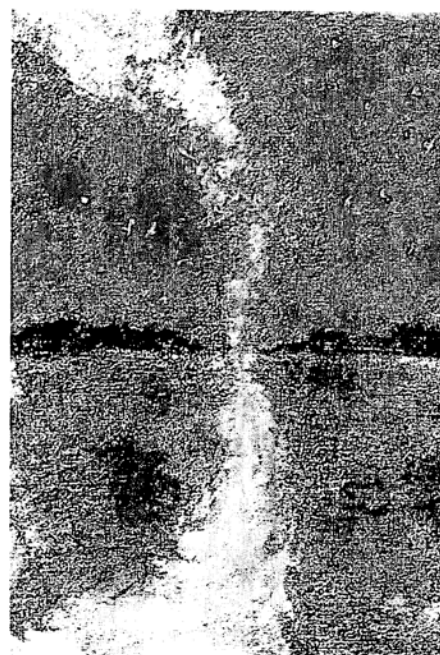


図5-2
同書の扉絵
「漢水と天の川」
協本弘氏画

なお、天の川は『天河』と呼ばれることもあります。これは『天の黄河』ということになります。

『万葉集 天の川伝説』の扉絵の様子は、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』のラストシーンにも同様の情景が出てきますね。（『星ナビ』2001年9月号p17でも少し触れられています。）地上の川が天の川に続いているというのは、天の川に対する昔の人の基本的なイメージだったようで、だからこそ、短冊を飾った笹竹を川に流し、天の川に届けば願いがかなうとされたわけです。

ということで、上の(1)、(2)の説ですが、私としては『最初に情景ありき』ということで(1)を採るべきだろうと思っています。その結果として、漢水の流域で天の川に関する伝説が発達したのではないのでしょうか。」

大越治さんからは、「いつも面白いお話、楽しみにしております。大島さんのメールを見て、高校で習った李白の詩に『雲漢』という言葉があり、それが天の川を指すのだと教わったのに感激して、そのころ部活動で作っていた12cm反射経緯台に『雲漢号』と名付けたのを懐かしく思い出しました。」

茨木孝雄さん（杉並区立科学教育センター）は、「七夕がらみということで、つい、また書き込みたくなりました。古来より、天上の世界を地上に投影しようとする思念は脈々と続いていたようで、天の川はその典型例といえましょう。私が訪ね歩いた“日本の天の川！”、たとえば、交野市の天の川、ヒメコソ（姫杜）伝承の地 鳥栖市山下川と小郡市の宝満川、白滝姫伝承の地 桐生市山田川、そして、北尾さんも取材された大島町中津宮の天の川などは、すべてほぼ南北方向へ流れる川の兩岸に二つの社をもっています。とりわけ中津宮は、天の川と二星、そしてその鏡像である地上の天の川と織女宮、牽牛宮

を一望できる天上のミニチュアという点で興味深いものでした。（文献に見る宗像神話の秘儀は痕跡すらなかったけれど）

ただ、服部完治さんの『地上の川が天の川に続いているというのは、天の川に対する昔の人の基本的なイメージだったようで、だからこそ、短冊を飾った笹竹を川に流し、天の川に届けば願いがかなうとされたわけです。』については、『博物誌』等中国の古文献（筏にのって海の彼方に旅した男が牽牛織女に会うという話）では、天の川が海と通じていると述べているようですが、地上の川をさかのぼっていくと、天の川に到るといのは、情景としては納得できるし、新しい民話に散見するものの、古代からそう考えられていたか、証左となる文献を知りません。短冊飾りの笹竹を川に流すという江戸期以降の習俗は、カミのふるさとを海だとするマレビト信仰に由来するでしょう。」

そこで、服部完治さんは、「フォローありがとうございます。笹竹流しは川を『下っていった』そのずっと先に異界を見ているわけですが、河口と異界の間にある『海』については、先の文章では言及するのを省略しておりました。」

文献的なことを少し追加させていただきますと、『博物誌』は私は見ておりませんので、いまのところ『荆楚歳時記』にわずかに引いてある？記述の範囲内でしか物が言えないのですが、引用部分に、『旧説に天河と海と通ず。近世、人の海渚に居る者あり。毎年8月、浮槎（いかだ）あり、去来・・・』（守屋美都雄・訳／平凡社東洋文庫）とありますね。（ただ、訳注には「博物誌とは別個の資料に基いて書かれたものであろう」とも書いてありますが…。）また、『荆楚歳時記』の補足部分に、今昔物語にも紹介されている有名な張騫の話がありますが、ここでは『漢の武帝、張騫をして・・・河源を尋ねしむ』となっていて、川

をさかのぼる話に変わってしまっているのが面白いところです。要するに、川の源も、河口の先の海の彼方も、昔の人のイメージとしてはどちらも天の川とつながっているわけで、このことは、『天の川』を『異界との境界』として捉えれば、神話の構造としては妥当な結果だろうと思われまます。

#蛇足ですが、ペンタグラムは護符として使われていたわけですから、境界→区域という意味合いが発生するのも妥当なことだと思います。

マレビット神のやってくる異界のありかは、時代や地域の異界観によってさまざまに変化するわけですが(←折口信夫)、天の川と七夕の伝説に関しては、男女が川の兩岸に対峙するという状況からして、そもそもは川の向こう岸(彼岸の国)を異界と考えていたような、非常に古い時代に溯るのではないかと私は想像して(空想して)います。]

北尾浩一さん(星の伝承研究室)は「久しぶりにメールを拝見させていただきましたら天の川に関する様々な楽しい、また重要な議論が展開し、今から追いつけるかどうか自信がありませんが、思うままに書かせていただきます。今、川へ流すところが少なくなってしまって残念です。大島の方も、川へ流すのを見に行こうと朝5時頃に出かけようと思ったのですが、天文教育研究会のナイトセッションで睡眠不足で7時になってしまい、既に5時頃にかたづけたと言われ、ショックでした。今は川、海に流さないそうです。

広島県瀬戸田町で、人間が死んだら行くところが天の川だという話を聞いたのを思い出します。『昔、賽の河原ってこう星がずーといっぱいようけ虹みたいになってたね。ああいうやつは見よった。死んだらあっこに行くんじゃ。賽の河原行くんだ』

一方で、自ら海に泳いで七夕の竹を流すというケースがあります。愛媛県越智郡魚島村

魚島では、七夕の竹について、『泳いで沖にあます』と語ってくれました。『あます』とは『供える』という意味で、若い者が沖まで泳いで流しに行ったのです。沖まで泳いで行って、鱻(ふか)におそわれることはないかについては、『その日にはね、伝説じゃけど、昔の言い伝えじゃけど、鱻はタナバタさんがちゃんと縛って来ささん言うてね。で、私ら、ずーと沖の方まで泳いで行きよった』と語ってくれました。人びとの心意のなかでの海と星との連続性はあったと思います。だからこそ、水平線が人びとにとって大きな意味があったと思います。星は、山や海、植物、動物等とちがいで、直接、接することはできないし、力を及ぼすこともできないのですが、例えば、星が海から姿を現すとき、イカも海から姿を現すという伝承にも、星と海との心意のなかでの連続性を見いだすことができると思います。(星の出の間隔の時間のタイミングに加えてそのような連続性があると思います。)栃木県塩谷郡栗山村川俣で、『月に一度』を『年に一度』と聞き間違えたので、年に一度しか会えなくなってしまうという話を聞いたのですが、この聞き間違いの伝承は海外に分布しているのでしょうか? 大林先生の本は買ったのですが、まだ読んでいません。最近、特にフィールドを急がなければ、と21世紀の伝承の記録とその録音の聞き取りばかりしています。

そうそう奄美大島では、『天の川ほだめて(離れて)照りよる星(ブシ)だもそ。祈り七夕にいきよちたぼれ。天にとよまれるはナナツブシ(七つ星)、スブシ、じん(下)にとよまれるりゃなきゃ(あなた)とわきゃ(私)』という歌を聞きました。そして、歌いながら踊ってくれました。『天の川で離れて照る星だ。七夕のときに会えるように祈ります。天にあるのは七つ星とスブシ(何の星か不明です)、下(地上)にいるのはあなたと私』という意味です。ところで、兵庫県高砂市戎町で

聞いた『ヨアサになって、タナバタさんがいっしょに入るとき七夕。夜明ける時分にいっしょに入って、タナバタさんはひとつになる』という伝承についてですが、歳差と緯度を考慮すれば、同時に七夕の頃に明け方に沈む緯度と時代が特定できるのではと思うのですが、まだできていません。七夕の夜明け頃に、織女と牽牛がいっしょに低くなっていくのを見て、織女と牽牛がひとつになって会うという思いが育まれたのですが、織女と牽牛は、出るときは約3時間も間隔があいているのに、沈むときはずっと間隔がちぢまるのは事実です。もし、そのような時代、緯度の考察をされた方がおられれば、ぜひアドバイスいただければ幸いです。今まで七夕の話は、調査のときに必ず聞くという項目ではありませんでした。星とのかかわりについて聞いたあとに、話の展開で聞くこともあったというのが今までだったのですが、これを機会に必ず聞く項目に入れても、と考えています。」

作花一志さん(京都コンピュータ学院)は、「服部完治さんの『(1) 中国の川はみんな東西に流れているけれど、漢水だけは南北に流れているから。(天の川と流れる方向が同じ)』について、必ずしもそうとはいえないのではないのでしょうか？漢水は南東に流れて長江に注いでいます。もっとも昔の水路は不確かですが。また、漢水あたりはかなりの山奥で戦国時代に楚の領土ですから、殷周時代には南蛮西戎地帯で、文字文化は波及していなかったのでは・・・。」

これに対して服部完治さんのご返答は、「これは小南先生が講演の中で言及されたことなので、どこの誰がこの説を唱えたのかといった詳しいことまでは、残念ながら聞いておりません。これ以前に、どこかで引用されているのを見かけたような気もするのです

が、どこだったのか・・・(汗)。お役に立てなくて申し訳ありません。」

また、作花さんは、「なお、天の川は『天河』と呼ばれることもありますが、これは『天の黄河』ということになります。黄河流域に栄えた殷の時代には天河と呼ばれていたものが漢の時代になって天漢と呼ばれるようになった。とは考えられないでしょうか？」

服部さん、『荆楚歳時記』も『天河』と書いてありますし、現代の中国でも『黄梅戲』という民間演劇の題目のひとつに七夕の物語があつて、それは『天河配』と呼ばれているそうです(これも小南氏による)。「天河」という呼び名は、漢水とは関係なく、単純に天の大きな川というイメージから生まれたのではないかと思われませんが、これも別の系統として、昔から現代まで続いているのではないのでしょうか。」とご返答されました。

茨木孝雄さんは、「私も始めにマニアックかな？と思いながらも・・・。服部さんのフォローに徹しましょう(^_^)。」

出石誠彦『支那神話傳説の研究』p.33(昭和17)での記述が初出かもしれません。『…然もそれは概ね西から東へ流れるのが地勢上一般である支那内地の河流の中、ほぼ天の河と方向を同じくするのは漢水のみであるから…』と、あります。続いて、森三樹三郎『中国古代神話』(昭和44)で、『…これは、恐らく最も妥当な説で、従ふべきものであろう。』と述べています。ついでに、滝川政次郎『京制並に都城制の研究』昭和42(第四章)『恭仁京と河漢崇拜』のなかで、秦の始皇帝以来、中国の帝王たちが彼らの都を設計するにあたって星辰及び天漢を重視したこと(渭水貫都。以象天漢)、その壮大な都に対する聖武のあこがれが恭仁京の建造プランに影響を及ぼした、と論じています。唐の時代、星だけでなく河漢もまた神として祀られていたようで

す。」と、送信されたのでした。

そういえば、恭仁京の真ん中を木津川が流れています。昔は泉河と呼ばれていました。この泉河は、恭仁京まではほぼ東から西へ、恭仁京以後は南から北へ流れていきます。

5.4 記紀万葉の天の川伝説

記紀・万葉時代の日本では、天上の地形(山川)と地上の地形(山川)は対応しています。天安河(あまのやすかわ)に対応する地上の川は、滋賀県の野洲川と福岡県の夜須町の夜須川であるといわれています。夜須とは、第15回天文教育研究会会場のあの夜須町で、当時の会長の横尾武夫先生がこの事に言及されています。この天安河は古事記、日本書紀の一書(第三)に出てきます[4]。そこでは、海原を支配していたスサノヲノミコトが「根の国」に戻りたくなり高天原に暇乞いに来たとき、そのすさまじさのため、アマテラスと天安河をはさんで対峙し、誓約(うけい)を行ったとあります。誓約とは、武力による直接対決でなく、占いで勝敗を決することですが、この度のイラク戦争に臨んで、すごく平和的な解決法であると思います。この誓約はスサノヲが勝ちますが、池田真澄氏[5]によりますと、この時に、天安河から星、特にプレアデスやオリオンが生まれたとのこと。書記では、スサノヲがこのあと、高天原で大暴れして、神の召す着物の機織りをしているアマテラスに天斑駒(あまのぶちこま)を皮剥して投げつけて、結局はアマテラスは天石窟(あまのいわや)は隠れるのです。これらの伝説は七夕以前のものでしょうが、アマテラスが機を織っているなど、記紀の時代には中国の七夕伝説が入ってきているのでしょう。

5.5 いろいろな銀河伝説

という様に中国や日本を中心にして、天の川の話が燃え上がりました。次に、他の地域での天の川の伝承をあげてみましょう。



図5-3 南天の天の川 ESOのHPから
http://www.eso.org/outreach/eduoff/catchstar/cas-projects/austria_milky_1/

中国の北方には、広大なシベリア平原があります。そこはアルタイの人々の故郷です。中国や日本では天の川は川なのですが、ここでも、その考えをもっている民族があります。

ウノ・ハルヴァのシャマニズム[6]では、次のような伝承というか、各民族の考えがあげられています。

- 1) 北シベリアでは(民族名はわかりませんが)、「銀河は天を横切る大河」である。
- 2) チュルク系のトルクメン、キルギスでは「鳥の道」、ヴォルガ・タタールとシュワチでは「雁の道」である。
- 3) フィン人とエストニア人は「鳥の道」
- 4) ラップ人は「鳥の小道」
- 5) オスチャーク人とヴォゲール人の伝説では「野鴨の道」、「南の鳥の道」
- 6) ブリヤート人(モンゴル系)とヤクート

人（チュルク系）の一部では「(天の) 縫い目」

- 7) サモエド人（トゥルハンスク地方）は「天の背」
- 8) ブリヤート人は、天の川をマザン・グルムという女神の乳からできたという伝説を持つ。酒に酔って眠っているグルムから宝物を奪った泥棒を目覚めたグルムが追いかけるときに自分の乳を搾って天に撒いたという荒唐無稽なもの語りである。
- 9) コーカサスのタタール人、オスマン人、バルカン諸民族では、ある男が盗んだ藁と干し草をしりから落としていったあとという伝説。そのため、「藁盗人の道」「あと」とかいわれている。
- 10) ヤクート人の一部は「神の足」という。これは創世のころ、神が天上を歩き回ったあとということである。
- 11) ヴォグール人では、「森の人のスキーの跡」、イルティシ・オスチャーク人では、「トゥン・ポク（森の狩人の名前）のスキーの跡という。どちらも神が地上に送った6本足の鹿を仕留める話である。
- 12) ツングース人は「熊のスキーの跡」と呼び、鹿を追いかけたのが熊となっている。熊が鹿を切り裂いて、銀河の両側に鹿の足（大熊座）と太もも（オリオン座）になったという。また、熊は疲れて足を引きずったので銀河の端は、二つに分かれている。
- 13) ゴルド人は英雄が残したスキーの跡という。
- 14) モンゴル人は「ボルハンの道」という。

さて、3)、4)、5) は渡り鳥の夜の道しるべからきているようです。11)、12)、13)は、スキーの跡に見立てています。この場合のスキーはノルディックで、スキーのすべり面にアザラシの毛皮などを張って前に進むようにしてありました。左右二本のトレースが銀河の吸収帯の様子に似ているからでしょう。

6) の天の縫い目という考えは、中国に類似のものがあり、女は簪で天を引き裂いて銀河を作り、その切り口から水がでて銀河になったというものです[2]。

なお、私がパキスタン北部の山岳地帯で聞いたのは、ブルシャスキー語で「ハルスガン」、シーナ語で「ドノポム」でした。「ドノポム」は「牛の道」という意味だと私のインフォーマント（ナガール人＝シーナ人）はっていました[7]。

トルコ語では、*hacillaryolu*（メッカ巡礼者の道）、*samanyolu*（藁の道）です[8][9]。

スペイン語では、*via lactea*, *galaxia*, *camino de Santiago* とあります。最初の二つはミルクの道をラテン語とギリシア語でのべたものですが、あとの *camino de Santiago* というのは、中世のサンチアゴ・デ・コンポステーラ（スペイン・ガリシア地方の聖地）への巡礼の道を表しています[10]。なお、コンポステーラには「星の原 *campus stellae*）」という意味があるようです。サンチャゴは「聖ヤコブ」のスペイン語形です。伝説では、大ヤコブが銀河に現れ、「スペインに行き、自分の墓を探そう」、カール大帝に道を示したといえます[2]。8世紀当時のヒスパニアは異教徒ムスリムの国でした。カール大帝にヒスパニア侵攻の口実を与える故事ですね。この巡礼道は今でも生きていて、フランスからピレネー山脈を越え東から西に向かっていくものです。

イスラムの人たちの話と合わせて見ると、天の川には、道という意味で巡礼の道しるべになったものも多いように思いました。

では、*the milky way* の元になったギャラクシーという言葉を使っていたギリシアでは、銀河についてどう考えているのでしょうか。ヘレニズム時代の知の巨人であるアリストテレスの著書[11]には次のことが書かれています。

1) ピュタゴラスの弟子たちは、銀河は太陽

の子パエトンが墜落したとき天から落ちた一つの星がたどった道という。

- 2) ある人々は、銀河は太陽のかつての軌道であるという。

しかし、現在の黄道帯は銀河の様になっていないので間違いである。

- 3) 銀河はある星達の放つ光である。つまり、星の固有の光である。その星の光は太陽に照らされない時に見え、照らされているときは太陽の光でみえないという。

ちょっとわかりにくいですが、アナクサゴラスは太陽を地球より小さいと考えていて、太陽に対する地球の影が天球上に通るところの星々が銀河として見える。つまり、太陽の軌道の反対側が銀河であると表現している。しかし、銀河は星座間において同じ形で、同じ位置に見える。太陽の移動によるなら、位置が変化するはずである。また、太陽の大きさは地球よりはるかに大きく、星々と太陽までの距離は地球と太陽までの距離より大変大きい。そのため、地球の影が星々に届くこともないであろう。

- 4) 銀河は太陽へ向かう我々の視線であるという考え方がある。しかし、銀河は水面に映るが、この時の視線はどう考えていいのだろうか？（視線というのは、物を見るとき、我々から視線を放射して、ものを見るという当時の考えかたです。）

このような諸説をあげて、アリストテレスは、「銀河は彗星と同じように蒸発物によって生じた最大の円環である。これは月下界の最上部で見られるものである。」と、銀河はあくまで地上世界と月の世界の間の現象であると多くの説明を費やして説明をしています。銀河が星に分解されるのを望遠鏡で観測したのは、ガリレオですね。

大島さんがされたように大林さんと魚住さんのご本を小暮先生から私もお借りして読んでみますと大林太良さん [2] は世界中の銀河

の伝説を次のようにまとめておられました。

- (1) 東アジアでは、銀河は川であるという考えが支配的である。
 (2) 東南アジアのタイでは、タイ人が白象の道、ベトナムの白タイ人は、豚の道というが、ビルマからアッサム地方では、季節の境目と考えている民族もある。インドネシアの島々では、大地を取り巻くナーガ（竜）の影とか、霧とかと伝えている民族があり、ジャワや台湾では川であるとする所も多い。
 (3) オセアニアでは、航海の目印であるという考え
 (4) アイヌ人は川の反映としている。その他のシベリア地域の伝承はウノ・ハルヴァに同じである。ベーリング海峡のチュコト半島に住むチュクチ族は天の川を砂川とよび、精霊だとしてしている。
 (5) 北アメリカでは、道
 (6) 南アメリカは靈魂の道
 (7) 南アジアでは、道 ガンジス河流域では、川となる。
 (8) 西アジアは、アッカド、ユダヤでは、竜



図5-4 銀河の輪。 グロティウスの星座絵

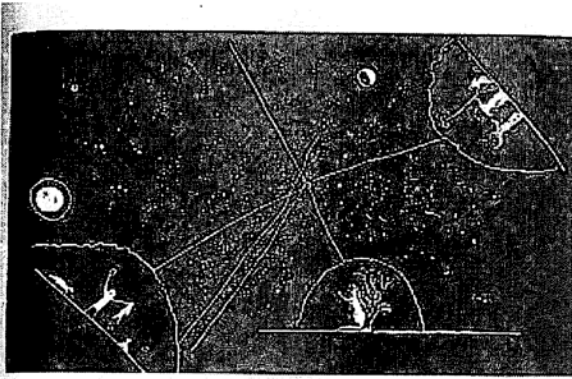


図5-5 チュクチ族の描いた天。右上はブレアガス、中央から左下にかけて銀河、右上は多分金星 [13] p.126

図5-5 チュクチ族の夜空。中央から左下にかけて天の川が見える。文献[3]p126

蛇、メソポタミア、エジプト、アラビア、ユダヤでは川、バビロニアなどで宇宙の構成物、近代には道。

(9) ヨーロッパでは、道、乳の道（星などの乳）古代ギリシアのアナクサゴラスは銀河を輝く車輪といった（図5-4）。

ドイツでは、ヤコブの道、ローマの道、マリアの道があり、キリスト教以前にはフラウ・フルダの道などが知られている。これらは巡礼の道を表している。

(10) アフリカでは、道が多い。錦蛇というものもある。

ところで、カルピスという飲み物をご存じでしょうか。カルピスは、明治35年に中国の内モンゴルに向かった三島海雲氏(当時25歳)がチンギスハンの末裔の鮑氏に、カメの中の酸っぱい飲み物と発酵クリームを振る舞われ、どんどん体力を回復したといます。彼は、帰国後、日本でも同様な飲み物を作ることに努

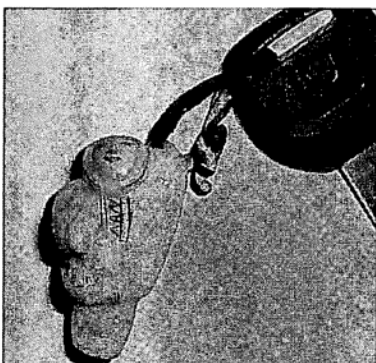


図5-6 チュクチのキーホルダー セイウチの牙で作ったお人形。チュクチは海に生きる民族である。10ルーブルで入手。



図5-7 カルピス。このごろはビンではなく、紙パックをよく見かける。

力し、カルピスと名付けたのです[13]。カルピスはサンスクリット語のサルピス・マンダ（最上の味・美味しさを表したものの、ちなみに日本語というか仏教用語の「醍醐」にあたりそれは、「非常に濃厚な甘い味の液」を意味します。）と牛乳のカルシウムからカルをとって名付けられたらしいです。カルピスの発売は大正8年7月7日、そこで、「カルピス」の包装紙には天の川をイメージする水玉模様が描かれているのです。このデザインは商業デザイナーの草分け的存在である、杉浦非水氏の手によるもので、七夕の天の川をイメージしたものだそうです[14]。つまりカルピスの水玉模様は星だったのです。(図5-7) このカルピスの原型となった飲み物とはモンゴルという馬乳酒(アイラグ)、ヤクート人のクミスだと思ふのです。クミスを飲んだことがありますが、薄い味の酸っぱい飲み物でアルコールの度数も低い(2%)ようです。

世界には、星を○で描くのか、☆や*で描くのか、また、星を「火」との関係つけて名付けるのか、「拡がり」や「撒き散らかし」に関係させるのかというように二つの流れがありましたが、それらと同じように銀河を文字通り天空の大河とするのか、天球を誰かが通った道と考えるのか、天の川にも、大きく分けて人類には二つの大きな流れがあるようです。

5.6 終わりに

いよいよ、この連載も終わりになりました。5回にわたる連載記事は、2001年8月に天文教育普及研究会のメーリングリスト (Tenkyo-ML) に出された「☆形の由来」を訊ねる問いかけに何人もの仲間が繰り広げた話題をまとめたものです。

天文教育編集委員会の福江純さんからのご提案でまとめる作業をいたしましたのですが、結局はまとめるどころか、手に負えないくらい位にまで話を大きく広げてしまいました。ML 投稿者の皆様の真意を伝えるどころか、「自説」を主張してしまったようで、心苦しい部分もあります。読者の皆様で、連載の内容にお気づきの点がありましたら、Tenkyo-ML に投稿して頂けませんか？このように、ML はみんなで話題を出し合い、物事を深める機能を持っています。是非、お願いしたいと思います。

最後に、星と☆形について二つのHPを紹介します。最初に紹介するのは、小さな天文学者の会のHPです。この連載の元になった山形大学の柴田晋平さんの所属されている会の会報 No.11 の質問とその答え『星はなぜ☆とかくか？』です。柴田さんの研究室の学生さんである山口康広さんと柴田晋平さんが著者です。ここでは、ML で交わされた情報がストレートにまとめられています。

そのアドレスは <http://astr-www.kj.yamagata-u.ac.jp/shoten/> です。

次に、この天文教育誌でも活躍されている白井正さんのHPにも素晴らしい記事があります。

<http://homepage3.nifty.com/silver-moon/aster/isk.htm> がアドレスです。是非ご覧になってください。

引用文献

[1]西村昌能 & TENKYO-ML ☆形チーム

2002 天文教育7月号 (14,No4) p36

- [2]大林太良,1999,『銀河の道 虹の架け橋』小学館
- [3]魚住孝義,1992,『万葉集 天の川伝説 中国・老河口紀行』花伝社
- [4]『日本書紀 (一)』坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋,1994,年校注 岩波文庫版 第1刷 p72、p76
- [5]池田真澄,1997,『日本神話の星々』自家製本
- [6]ウノ・ハルヴァ 田中克彦 訳,1989,シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像 三省堂
- [7]西村昌能,1992,架橋 第2号 p88
- [8]トルコ語小辞典 泰流社,久保義光,昭和62年
- [9]続トルコ語小辞典 泰流社,久保義光,昭和62年
- [10]現代スペイン語辞典 白水社,1990
- [11]アリストテレス 気象論 第8章 p24 アリストテレス全集 岩波書店,泉治典訳,1969
- [12]天文資料集 No1 グロティウス「星座図帳」千葉市郷土博物館,1999,
- [13]<http://www.calpis.co.jp/80th/CALPIS/index.html>
- [14]<http://www.ben7.com/kotae/6/6.htm>

西村昌能 & TENKYO-ML ☆形チーム